チューリヒ歌劇場の《皇帝ティトの慈悲》

八重桜が満開の4月23日、チューリヒ歌劇場で《皇帝ティトの慈悲》がプレミエを迎えた。満席の中、幕が開くと、モノトーンの舞台。中央に螺旋階段があり、ヴェッセリーナ・カサロヴァのセストとエヴァ・メイのヴィテリアが黒い衣装で立っている姿が絵になる。モーツァルトの弟子が作曲したとされるレチタティーヴォを、すべて台詞にしての上演だったので、音楽的継続感はしばしば阻止されるが、劇的効果は高かった。

歌手陣は粒揃いであった。ドラマティックな声が要求されるヴィテリアに、メイがどう立ち向かうのかと案じていたが、アグレッシヴな響きを彼女の声に混ぜて、上手く解決していた。ヴォリュームはないがよく響く胸声で低音もこなし、舞台姿も美しい。

カサロヴァは、話声も低く、男装がさまになっていた。聴き心地のよい歌唱でテクニックもいい。ただ、有名なアリア〈パルト〉では、声の焦点を鼻に集め過ぎて、言葉が不明

夢になり、又、過剰にクレッシェンドしたり、強弱の差の激し過ぎる歌い方が、モーツァルトの音楽特有のラインを妨げていたが、観客からは喝采を浴びていた。

ティトのヨナス・カウフマンも、母音の開き過ぎが、若干モーツァルトのレガートから遠ざけていたものの、しっかりした声で、一度もファルセットに頼ることなく、難しいパッセージも楽にこなしていた。台詞部分での演技にだけ、エレガントさが欠けていて、皇帝どころか、マフィアの手下に見えたが、これは、アニウス役のニキテアヌにも見られたので、演出家の意向なのかもしれない。

今回も演出陣がブーイングで迎えられたのは、衣装の不統一感もあるだろう。ティトら古代ローマ人は第二次世界大戦を思い起こさせる軍服。セスト、アニウスはスーツ。ヴィテリアはドレス、セルヴィリアだけが、オリジナルに近い、古代ローマ人の服装で、合唱はひと昔前のシチリアの日曜日、教会の帰りの人々のようだった。

指揮者ウェルザー・メストの風邪のため、オケ合わせが各幕1日しかなくゲネ・プロを迎えたそうだが、多少ミスが目立ったのと、ヴィテリアの最後のアリアでのバスホルンソロが目立ち過ぎて、邪魔になっていたのは、やはり練習時間の不足から来ているのだろうか。歌手それぞれに対しては観客の拍手も熱いのに、劇場全体の体温が低い感じがしたのは、音楽的な統一感が欠けていたからかもしれない。 **(中 東生)**

セスト、ヴィテリアをそれぞれ演じたカサロヴァとエヴァ・メイ

※P210左上に続く